講演要旨

思考の危機と危機の思考――哲学の終わりなき挑戦

高千穂大学教授

齋藤元紀

「これから到来する「危機」が、以前とは比較にならない未曾有の「危機」にはならないなどと、誰が言えるでしょうか」。2015 年刊行の拙著『現代日本の四つの危機――哲学からの挑戦』（講談社メチエ）で私はそう書きました。当時は東日本大震災と原発事故の影響冷めやらぬ中、五輪への機運も高まっていましたが、その後現在に至る世界情勢を考えれば、先の嫌な予感は残念ながら的中したと言わねばなりません。もっともこの予感は当てずっぽうではなく、一定の哲学的認識に基づいていました。それは、われわれ自身がそもそも危機的存在である、という認識です。われわれが危機的存在であるのなら、われわれの世界もわれわれの思考も絶えず危機的であることになりますが、実はそうした危機に対峙する知の役割を担ってきたのが哲学に他なりません。思考を危機に陥れるものは何か。危機に挑む思考とはどのようなものか。その具体像を描き出したいと思います。